

プロ農家から高齢者、女性、新規就農者まで
野菜園芸の総合大百科

2019年版

農業技術大系

野菜編

全12巻 13分冊 ¥154,765円+税

一般社団法人 農山漁村文化協会

東京都港区赤坂7-6-1 TEL. 03-3585-1147

全12巻 13分冊の内容構成

第1巻 キュウリ・ニガウリ

第2巻 トマト

第3巻 イチゴ

第4巻 メロン類・スイカ

第5巻 ナス・ピーマン(カラーピーマン、
トウガラシ類)・カボチャ

第6巻 レタス・サラダナ・セルリー・カリ
フラワー・ブロッコリー

第7巻 キャベツ・ハクサイ・ホウレンソウ・
ツケナ類・ナバナ類他

第8-①巻 ネギ・ニンニク・ラッキョウ・
ニラ・ワケギ・その他のネギ類

第8-②巻 タマネギ・アスパラガス

第9巻 ダイコン・ニンジン・カブ・ゴボウ

第10巻 マメ類・イモ類・レンコン

第11巻 特産野菜・地方品種

第12巻 共通技術・先端技術

*分冊販売はいたしません。

*年1回追録(加除)を発行します(有償)。

2019年版「追録44号」企画の重点

- ・タマネギ——春まき新作型と雑草・貯蔵病害対策
- ・ネギ——新技術と栽培・出荷調製の効率化
- ・アスパラガス——病害を防ぐ、端境期に稼ぐ
- ・イチゴ——授粉の新技術

**(タマネギ——春まき新作型と雑草・貯
蔵病害対策)**

タマネギは、サラダ、野菜炒め、シチュー、カレーなど、さまざまな料理に利用され、野菜の1人当たり年間購入量でも第2位を占める。一方で、中食・外食での利用が多く、タマネギの輸入量だけで全生鮮野菜の輸入量の3分の1以上を占めるなど、野菜の国産シェアを回復するうえで最重要の品目となっている。

2000年以降、輸入野菜の残留農薬が問題になり、タマネギでも2014年に中国産から残留農薬が検出された。国産志向が高まり、加工・業務用でも国産を求める声が強まる中、国産タマネギの端境期である7~8月に収穫する新しい春まき作型が開発された。今号では、この春まき新作型の生産者事例(「宮城県岩沼市 農事組合法人林ライス 秋まき用品種を生かして春まき栽培10a 5.8t」)のほか、現場で問題となる雑草対策(「秋まき普通栽培」の「雑草防除」の項で詳述)や、



写真1 タマネギ9tどり農家の歩行型ピッカーによる収穫（兵庫県南あわじ市）



写真2 乗用機械によるネギ収穫作業（あきた白神農業協同組合）

「おもな貯蔵病害とその対策」、近年の多雨傾向を踏まえた「窒素分施」を紹介した。

ほかに、省力化・規模拡大を可能にする「直播栽培」、水稻跡が中心の府県産地で収穫・調製の機械化体系を構築した「フレコンバッグを利用した暖地タマネギの機械収穫・調製体系」、最新の植物分類を踏まえた「タマネギの原産と来歴」、今日までの育種の流れをまとめた「日本におけるタマネギ育種の歴史」、北海道の春まき栽培の新技術「春まき秋どり栽培（早期播種）」「土壤凍結深の制御と効果」、静岡県の「秋まき超早出し栽培」、兵庫県の「除湿機利用乾燥貯蔵」も収録した。

兵庫県の9tどり農家の碇茂さん（写真1）、北海道の春まき多収農家の飯田裕之さんなど、精農家の技術と経営の事例も充実している。

カラー図鑑も、雑草防除と薬害、排水対策、収穫機械化体系など、見応えがある。

〈ネギ——新技術と栽培・出荷調製の効率化〉

業務需要が増え、周年供給が求められるネギを、前号に続いて取り上げる。

水田ネギ特有の広いね間を生かした乗用管理機の導入と出荷・調整ラインの見直しで省力化を進める福井県の農業生産法人（「春どり、夏秋どり」）や、「作期拡大のための7月どりハウス越冬大苗栽培」で注目されるJAあきた白神の事例（写真2）、宮城県が開発した「水稻育苗箱を利用した小ネギの簡易養液栽培」、ネギの形態的・生態

的特性を明らかにした「ネギの性状と植物としての位置」を収録した。

カラー図鑑も、剪葉・剪根の影響、株間・灌水・土寄せと生育の関係、各作型の品種など、貴重な内容となっている。

〈アスパラガス——病害を防ぐ、端境期に稼ぐ〉

アスパラガスは年間を通して一定の需要があり1kg単価もこの20年ほど上昇・安定傾向にある。直売所でも人気があり、栃木など新興産地も出荷量を増やしている。しかし、天候不順や病害のため、既存産地の出荷量減少が著しく、周年安定供給のためには端境期出荷も大きな課題となっている。

今号では、アスパラガスの安定生産に必須の技術である茎枯病・疫病などの主要病害への対策のほか、冬の保温に地下水を利用して早出し・長期どりを進める栃木県の「ウォーターカーテン保温栽培」、国産アスパラガスがほぼ皆無となる初冬の出荷を実現した「北海道美幌町での11月初旬出荷の伏込み促成栽培」（写真3）を収録した。

〈イチゴ——授粉の新技術〉

イチゴ栽培の新技術として、低温・寡日照でも活動する在来の授粉昆虫・ヒロズキンバエ（商品名：ビーフライ、写真4）を収録した。ミツバチ、マルハナバチに比べて、活動温度域が10～35℃と広いうえに、活動に紫外線を必要としないので、



写真3 11月初旬出荷の伏込み促成栽培アスパラガス（北海道美幌町）



写真4 イチゴの新たな花粉媒介昆虫「ビーフライ」（奈良県）

紫外線カットフィルムと併用できる。軽量で訪花ダメージも少なく、人を刺すこともない。1匹2円で、週250匹/aを放飼する。現場での利用は年々拡大している（2017年度581万匹）。